

研究室紹介



環境共生科学プログラム
西村雄郎先生



地域科学プログラム
布川弘先生



人間科学プログラム
桑島秀樹先生



言語文化科学プログラム
鎌田勇先生



情報行動科学プログラム
林光緒先生



創造科学プログラム
田中晋平先生

研究室紹介

専門は？

社会学、特に地域社会学（＝農村、都市、環境等に目を向ける社会学）です。現在は大阪・近畿都市圏における都市の研究を主にしています。

きっかけは？

中・高校生の頃から日本社会の現実に興味があり、社会学が現代日本史を勉強しようと思っていました。そんなこんなで、大学は立命館大学の産業社会学部へ行きました。

ここで、現在も研究を一緒にさせてもらっている岩崎信彦先生に出会いました。この先生は私と違って、とても頭のいい理論家で、出会った時は頭でっかちの「イヤなやつ」と思いました。しかし、岩崎先生に指導をうけながら寝屋川市の文化住宅街（＝木造住宅密集地）の調査をしているうちに社会学、とくに社会調査の面白さを知りました。また、卒論をこの地域の住民活動の研究で書いたんですが、このときに社会学の現実分析の手法を勉強するなかで、社会分析の理論と現実社会の違いという社会分析の難しさを知りました。

立命を卒業して金沢大学の大学院に行き

西村雄郎研究室 Takeo Nishimura Laboratory



担当授業科目

教養 / 現代社会学A・B、地域社会学
生活をとりまく家族・地域・産業
専門 / 社会環境基礎論、地域社会学
演習

環境共生科学プログラム

ました。ここで一番驚いたのはマンモス私学にはなかった少人数での文献講読の授業です。M・ヴェーバーの研究者である佐藤嘉一先生の「一語一語にこだわりながら、文献の全体像を正確につかまえようとする厳密な文献講読の姿勢にはカルチャーショックをうけました。

こんな先生たちに出会い、調査を続けているうちに、たまたま助手のポストが空き、そこに運良く就職できたのが、この業界に居続けることになったきっかけです。そして、今も飽きずに、大阪都市圏の地域社会研究をしています。

醍醐味は？

社会学の面白さは、いろいろな世界をのぞき見る、のぞき見の楽しさです。僕は北海道（小樽 札幌） 京都 金沢 鹿児島 広島と住むところを替えてきましたが、同じ日本のなかなのに各々の地域の人の暮らし方はそれぞれ違います。僕は、その違いをおもしろがって見歩いてきました。

僕にとって社会学とは、まず、興味をもった地域を歩き回ることから始まります（この意味で僕の社会学は体力の社会学です。歩地べたにはいつくばる社会学です）。歩

き回ることで、僕が興味をもった地域がどの様につくられ、どのような特質を持っているか感じる事ができます。僕は、歩き回り、ある地域をとことん見詰め、そして考えることで、日本社会の現実、世界社会の現実を理解しようと思ってきましたし、これを続けてきたことで自分なりに現実社会が説明できることの楽しさが、僕にとつての社会学の面白さです。

学生時代は？

高校では学校の新聞局に入り、好き勝手の新聞記事を書いていました。これは社会学に通じるものがあったとしても面白くて、ほとんど勉強はしませんでした。大学時代は、よく飲み、現実社会のあり方や、社会学について、たいした知識もないのに、あれやこれや勝手なことを言いあいました。今考えると馬鹿みたいなんだけど、このとき語り合った友人が学生時代の最大の財産です。この友人たちとは、今でもあえば朝まで飲みまくり、しゃべりまくっています。

昔の大学生と今の大学生の違いは？

僕は、飲んで、食って、前後不覚になりながら議論し、喧嘩もしてきました。

今の学生さんは、ちゃんとしたものを飲み、食いして、議論や喧嘩はするんだろうか？みんな優しく、用心深く、他人のことに立ち入らないようにしているように見えるんだけど、そんなことはないんだろうか？

また、今の学生さんは、海外へ行くとか、ボランテニアをするとか、誰かによってつけられた物語を追っかけているようにみえるんだけど、どうなんだろう？他人がつくった物語を追うことはわかりやすく、心地いいことかもしれないけれど、もう少し自分の身の回りを見つめ直して、自分だけの物語を作ることにはできないのかな？

趣味は？

スキー（先生は出身が北海道なので3歳から始めていて、上手だそうです）や、テニスなど。体を動かした後でのビールは最高です。

広大生に一言。

少し真面目に授業に出すぎるようにおもいます。まじめに授業に出ればどうにかなると思うのは間違いです。枠にとらわれな自由な発想をもち、行動を起こすには、

いろいろなことを経験し、本を読み、考え、自分自身の問題を見つけ出すことが必要だと思います。そして、友人との本音のやりとりは他人のものの見方を知るという意味で、とても大切です。体を動かし、飲んで、食って、語り、考える。これが重要じゃないのかな。

●●●取材を終えて●●●

私は先生には授業でお世話になっており、先生のお話をもっと伺ってみたいと思って先生にインタビューさせて頂きました。先生はお忙しい中、質問にユーモアのある言葉でお答えして下さい、非常に有意義な時間を過ごさせて頂きました。この場を借りまして改めて御礼申し上げます。

（担当：16生 丸山弓貴）

研究室紹介

研究内容

僕の研究内容は明治から大正の都市の社会史です。都市の中で生活している人たちの人と人との結びつきがどう変わってきたかを研究しています。

今の日本はみんなが同じくらいの水準で生活し、欧米に比べて貧富の差がありません。これが今の日本の社会の大きな特徴だと思います。この社会がどうやってできたかに関心を持っていました。昔の貧富の格差が相当あった時から、どうやって中流社会ができたのかを研究することは実は日本の社会システム全体に関わる研究です。

日本人は「国」というと「お上」つまり「政府」を思い浮かべます。国と政府の区別がつかず、国を自分とは違うものと考えます。

欧米では反対に国は自分たちのものという意識があります。政府は国の仕事を任している機関だから国民の言うことを聞かなければならないと考えます。あくまでも基本は国を作っている一人一人にあるという意識が欧米にはあります。

しかし日本にはその意識はない。「官」というものがまずある。それを自分たちとは違う、自分たちに命令し、自分たちを指導するものと見ます。国が自分たちのもので

布川弘研究室

Hiroshi Nunokawa Laboratory



担当授業科目

教養 / 生活から見た日本の近代、ヒロシマ学、日本史B、現代世界の成立と課題
専門 / 都市社会史、都市社会史演習

地域科学プログラム

はないのです。

しかし、今はその意識も変わってきています。イラクで人質になった高遠さんのように「お上」と関係なく自分の意志で活動する人が出てきました。そしてそういう人たちは国際社会で評価されていて、日本の評判を上げているのですが、日本国内では非難されてしまつ。

今の日本の評価は国際社会の評価とずれが生じています。だから、このシステムは変える必要があります。そしてシステムを変えるためにはそのシステムができた歴史的背景を知つたうえで今の国際社会における日本の状況を考えないといけません。そして自分たちが国を作るんだという意識が必要です。

都市社会史を研究することで、いかに日本のシステムが「自分たちの国は自分たちで作る」と言う意識を持たせないものであるかを自覚できます。自覚をしないと意識を変えることは難しいので自覚をすることは大事なことです。

研究室紹介

学生生活

当時の大学は授業に出ようが出まいがどつちでも良かったんです。教授は自分が研究していることは高い次元のことで、それが学生に分かるうが分かるまいがどうでも良いと考えていましたから、授業は難しく分らない。分らないから授業に出ずにほかのことをしていました。

僕は「歴史科学研究会」というサークルに入っておりサークル中心の生活をしていました。サークルの活動内容は、先輩たちと半年間のテーマを決めて研究する分野を何人かで割り当ててレポートにまとめて提出するというものでした。先生のいない授業のようなものでした。

本は月に10冊くらい買っていて、本代を稼ぐためにバイトもしました。

趣味

カラオケが趣味です。一青窈（ヒトトコウ）や宇多田ヒカルが好きで、歌うこともできますよ。レパートリーが広いことが自慢で、クラシックや演歌も歌えます。音域が広いのも自慢で女の人の曲も歌えます。

学生に一言

教員と対等につきあって、学生が大学を

作るんだという意識を持って欲しいです。そして自分を大事にしてください。自分の考えていることを大事にしてください。親の意志とかでなく、教員がこういったからやるといのでなく、自分がこうしたいからやると考えてください。学生が大学を作るんだという意識を持って欲しいです。

●●●取材を終えて●●●

私は布川先生の研究室紹介をするにあたり、広島大学のホームページで先生の専門を調べました。先生の専門は近代日本の都市社会史でした。私は「歴史の先生」という程度の認識でしかありませんでした。しかしその認識は浅はか過ぎました。

私が想像していた「歴史の先生」は「教科書に書いてあることを良く知っている人」または「まだ分かっていない昔のことを資料を使って調べる人」でした。しかし布川先生はそんな単純な研究をしていらつしやる方ではありませんでした。布川先生は「都市社会史を研究することが何に繋がるのですか（大意）」という私の質問に「昔のことを知ることで現状をどう変えれば良いかわかる」とお答えになりました。先生は日本人の「国」「お上」「政府」という考え方は変えるべきだとされ、「そのために日本人の



先生の研究室の蔵書はたいへん多いです。

『国』『お上』『政府』という考えがいつ生まれただのか知る必要がある」とおっしゃいました。先生は昔のことを知るために昔のことを研究なさっているのではなく、まさに「温故知新」のために研究をなさっています。

先生とお話する機会を持たれたことでも歴史を学ぶべきなのかということへの答えと、先生の社交的なお人柄を知ることができ、今回の取材は大変有意義なものでした。

（担当：16生 高橋征志）

研究室紹介

研究内容について

美学 (aesthetics = 感性の学)、芸術学ですが、実技ではなく美とは何か？芸術とは何か？ということについて、特に18世紀あたりのイギリスおよびアイルランドの美学思想や崇高論(道徳的な人格性だけでなく山岳体験・廃墟・グロテスクといったものにも関わる)について研究しています。

きっかけ

美術館にある芸術作品などに触れることもありましたが、田舎で育ったのでむしろ地水火風といった「自然」の美学や山岳美学に興味を持ちました。それと昔から岩石や化石には関心があり、それが「地質学」をも美学という視点で捉えるというまさに総合科学的な独自の研究姿勢につながっていききました。

どんな所が面白いか

感動したモノやコトを言葉にして伝えることができることです。また英文学・国文学・哲学・歴史学・社会学といった既成の枠で区切れない学際的なところです。

桑島秀樹研究室

Hideki Kuwajima Laboratory



担当授業科目

教養 / コミュニケーション B・B、
芸術学 A・B
専門 / 表象文化論、表象文化論演習、
文化創造論、文化創造論演習

人間科学プログラム

研究してよかったと思うことは

世の中を広い視野で見られるようになったこと、自分が思ったことを明確に、擬音語や擬態語に頼らず、きちんと客観的かつ論理的な言葉で表現できる能力が身についたことです。

どんな学生でしたか

高校では「不良少年」だったので(笑)、その反動からか大学1年生の時は一度もさぼりませんでした。2年生からさぼりはじめましたが(笑)。3、4年生の頃は予備校講師のバイトをしながら芸術に触れる機会(映画や舞台等)を作っていました。

学生時代の失敗談

留学で初めてアメリカに行った時、シカゴに行く予定でしたがハリケーンで行けなくなっただので、カウボーイタウンに寄り道したら帰れなくなってしまいました。夜になると人もおらず、民家を訪ねると銃を持った人が出てくるし、警官に道を聞いても酔っぱらっていてまともに対応してもらえません。なんとかタクシーをひろうことができたと思ったら、明らかに生物学的には「男性」と思われる運転手が女装し

研究室紹介

に乗ってました(笑)。一応なんとか無事に帰れましたが、それと学生時代、研究棟の屋上で花火をあげていたら、警備員さんが来て怒られました。お茶目だったんです(笑)。広大ではもちろんそんなことをしてはいけませんよ、学生のみなさん!!

趣味

化石採集、温泉めぐり、アウトドア、(山登りや釣り)です。それとよく間違えられて戸惑うのですが、同姓同名で誕生日も同じ(但し、年齢は彼の方が少し上らしい)大阪在住の、金魚をミキサーにかける写真を発表している現代写真家の方がいますが、まったくの別人です。何も関係ありません。

学生に一言

学生時代はよく食って、寝て、遊べ!それと、もう少し元気よく素直に生きてほしい。また学外の友達や年上、年下のよい友達を見つけてほしい。そして、何より世の中の見方を広げ、且つ物事を客観的に自分自身の言葉で表現できる力を身につけてほしい。もちろん、そこにはユーモアも忘れずに。研究室に居るときはいつでもどうぞ。



●●●取材を終えて●●●
敬語もろくにできぬ私に笑顔で根気よく付きあって下さった桑島先生、本当にありがとうございます。先生へのインタビュ―、テープ起こしと初めてのことばかりで大変でしたが、皆のおかげで原稿を完成することができました。ただ私のあまりの文章力のなさ故もつと上手く伝えられたのではないかと、という反省点も見つけられました。自分が聞いたことを人に「伝える」のは難しいです。

(担当:16生 溝淵めぐみ)

上の二つの写真はゼミの風景です。皆さん頑張っています。